

幕末明治の写真師列伝 第二百二十二回 宮下欽 その四十

(書簡一通挿入)

昨夜者尊来被下候処、折角[悪]敷不在にて失敬いたし候、偕(ルビ:さて)兼而荊婦迄申達口御座候由ニ付、即金二円差送り候、御落掌被成下度、旁外者拝眉可申上候、頓首

「五月二日

尚々、過日相願候鏡の持ひ処、此婢へ為御知被成下度奉願上候、」

(註: □は文字がない、空欄)

(書簡裏)

(鉛筆書き)

午前第九時頃松蔵、石坂へ行正午過同人帰ル、午前第十一時頃壬申方来ル、午後第五時過、宮下壬申へ行同七前宮下帰ル、同第六時頃齋藤氏来ル、同第七時前同人帰ル、午前第十一時頃壬申方来ル5、2、5午前第九時頃齋藤氏来ル、午後第四時頃同人方文来ル、西村へ郵便

出ス、湯屋たはこ(註: 煙草)三遺ス、

(墨書)

六枚一組

四ツ立 二分二朱 三分五両

四両七分

六ツ立 二分 二分二朱

三

八ツ立 一分三朱 二分二両二分

九ツ立 一分二朱

(鉛筆書)

200, 夕玉 1

100, 人玉 1

11, 紙 100

5, 台 1000

30, 硝子

10, 宝 1

5, バツ 1

20, コロ 3

5, 鉄 10

3, 大台 18

2, セイ

40, 銀

5, 曹

5, 金

10, 硝

5, 醋

5, 硫

30, 色

30, 運

—

521,

「五月同三日 曇

一、第九時過松蔵・大山・宮下三人ニ而壬申義塾へ写真ニ行、午後第一時過帰ル、不出来ニハ

候得共種板一枚持帰ル、○同第十時前元今紫(註1)、当時今香来ル、菓子・茶出ス、先生御在宿ニ候ハ、御目ニ懸り度旨申候ニ付、留主之旨申候所、写真致し呉様頼ニ付、硝子取二枚・紙取種板三枚与三郎存る、先生方へ郵便ニ而、遣呉候旨相頼、文一封認相頼、且金二歩[紙二包]差出ス、蕎麦ニ而も食し可被下と申、楼上一同へ遺シ、同第十二時過帰ル、○第十時頃岩間氏方延引ニ相成候言訳之手紙相添、大ブック使之者ニ為持返ス、○午後第四時頃風間氏来ル、茶一袋為土産持参ス、菓子・茶出ス夕飯出ス、同第六時頃帰ル、○同第六時過武助宅方使来リ、区中人員之事ニ付、今日中ニ宅迄来リ呉候旨申来リ候ニ付、同人即時ニ使と一同ニ宅へ行、尤たか今夜ハ四ツ谷に泊シ可申旨相断有之、○第十時過工藤氏(註2)夫婦ニ而来ル、塩鮭二尺到来ス、菓子・茶出ス同第十一時過帰ル、

註1: 今紫

生年月日: 嘉永6年(1853)~大正2年(1913) 9月29日

職業: 花魁、女優。本名は高橋 幸。別名・芸名=高橋屋今紫

京都の三条家諸大夫森寺大和守の娘に生まれ、御用医師・高橋丹斎の養女となるが、維新前頃から養家が衰微したため、16歳で自ら江戸柳橋の下地っ子として売られ、吉原の大黒屋(後の金瓶楼)の妓となり静と称す。その後、三代目今紫を名乗り、幕末の名士との交流や装束の豪華さ、気風のよさで知られ、花魁道中を2年続けるなど全盛を誇る逸話が多く伝えられる。明治5年(1872)芸妓解放令で吉原を出て、新富座の株を買い、芝居茶屋三州屋を、後の待合

「御行亭」を開く。明治25年(1892)女優となり三崎座で男女合同劇を演じ、高橋屋今紫の名で遊女阿古屋に扮するなど好評を博す。関西から九州へと巡業し、晩年は画家・広湖を養子とした。(日外アソシエーツ編『新撰 芸能人物事典 明治~平成』(日外アソシエーツ、2010年)より筆者編集)

「当時今香来ル」とあることから、この当時の芸名は「今香」と称していたと思われる。

註2: 工藤氏とは工藤利三郎のこと。工藤利三郎は嘉永元年(1848)、徳島市川内町の生まれ。明治6年(1873)当時は赤坂裏一丁目八番に住んでいた。横山松三郎より写真を学ぶ。明治10年(1877)、徳島の藍商・板東家の東京支店に勤務。翌年(1878)、「古書畫鑑賞会」に参加。日本の古美術の惨状を知り、文化財を写真に記録するため、明治16年(1883)頃、徳島で写真館を開くが、後に奈良に転居。明治26年(1893)、猿沢池畔に古美術写真専門の「工藤精華堂」(飛鳥園)を開業する。美術写真の草分けとして、私財を投じて、写真集『日本精華』全11輯を刊行(小川一真の手によるコロタイプ印刷にて出版。昭和4年(1929)、享年81で逝去。

参考: 中田 善明『藤利三郎一国宝を撮した男・明治の写真師』(向陽書房、2006年)

(※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字)

(森重和雄)